

「レ系指示詞＋ガヤウ」考

熊谷，政人
九州大学大学院博士課程，日本学術振興会特別研究員

<https://doi.org/10.15017/8899>

出版情報：語文研究. 102, pp.36-45, 2006-12-15. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

「レ系指示詞+ガヤウ」考

熊谷政人

○. 始めに

古くは、「カク(カ)」「サ」等と表現されていた指示副詞が、中世に、「コノヤウ・ソノヤウ・アノヤウ」等の、指示代名詞「コ・ソ・ア」を冠する形式に交替した事が先行研究によって指摘されている。しかし、既に、中古において、「コノヤウ・ソノヤウ・アノヤウ」と類似した語構成を有する形式が僅かながら確認される。それが「コレガヤウ・ソレガヤウ・アレガヤウ・カレガヤウ」という形式である。以下、これを「レ系指示詞+ガヤウ」と表記する。本論では、この「レ系指示詞+ガヤウ」という形式に注目し、その特徴と変遷について論を述べたい。

一. 先行研究

現在、指示詞に関する研究は非常に多数に上る。しかしながら、それらは主に指示代名詞に関するものであり、指示副詞に関する論は比較的少数である。その中で、本論と最も関連が深い研究は岡崎友子氏によるものである。以下にその一部を引用する。

また中世には、直示・観念用法を持つア系列が見出せるようになる。(現代語のア系まで用法は変化しない)。これで指示副詞は、上代・中古のカク系列・サ系列という2系列から、カク系列・サ系列・ア系列という3系列

へと変化するのである。(岡崎(二〇〇二))

そして、中世以降になると「カウシタ(コウシタ)・コノゴトク・コノヤウ・コウヤツテ」が次々と現れ、指示副詞によつて述語の表す状態・時間的局面を、より分析的に表現する方向へと進んでいくことになるのである。

(岡崎(一九九九))

これらは主に、「カク系列・サ系列という2系列」から「カク系列・サ系列・ア系列という3系列」へと変化した時期についての記述である。岡崎氏によれば、その時期は中世という事になると思われる。又、岡崎(一九九九)にあるように、中世以降に様々な語が見られるようになるという点は私も同意するものである。しかし、岡崎氏の一連の論を含め、指示詞研究においては殆ど触れられていない語がある。それが「レ系指示詞+ガヤウ」という形式である。この形式は知る限りでは、迫野虔徳氏の論文「指示詞におけるコソアド体系の整備」(『語文研究』第九四号(二〇〇二))において、以下のように触れられているのみである。

「コンナ」「ソナ」に先行したと思われる「コガイ」

「ソガイ」、「コナイ」、「ソナイ」は、それぞれ「コレガヤウ」「コノヤウ」の転と考えられる。(注5)

注5 「コギヤ」「コゲ」をはじめとする諸形は、そのかたちから見て「コガイ」に遡るものと思われるが、このかたちは「コ(ソ、ア)ガヤウ(様)」あるいは「コレ(ソレ、アレ)ガヤウ(様)」から、転じたものかと思われる。「ガヤウ」の後行母音の脱落(重音脱落)によつて、「ガイ」になったものであろう(ミタヤウダがミタイダになる変化に類似)。「コガイ」は「コガヤウ」、「コソガイ」は「コレガヤウ」の転とも考えられるが、「ソ」の単なる挿入、あるいは脱落と考える余地もある。(以下略)(迫野(二〇〇二))

ここでは、現在の方言に見られる「コガイ」等の語の原形として、「コレガヤウ」「コガヤウ」という語が記されている。又、指示詞研究ではなく、方言について述べた研究の中には、同様の趣旨の記述が見られる場合もあるが、いずれも「コガイ」等の語の原形として記されているのみであり、「コレガヤウ」「コガヤウ」に焦点を当てたものは見られない。従つて、その詳細はさほど明らかではないと言つて良いよう

に思われる。

二、「レ系指示詞+ガヤウ」用例

先ず、現段階において確認している「レ系指示詞+ガヤウ」の全用例を挙げる。調査及び、翻刻には、『日本古典文学大系』『新編国歌大観』を用いた。傍線部は私に施したものである。

尚、「レ系指示詞+ガヤウ」は「コノヤウ」と同様に、連用修飾だけでなく、連体修飾機能も持つ。従って、これを一括して指示副詞と表現する事は必ずしも適當ではないが、本論では先行研究に倣い、指示副詞という呼称にこれを含めて用いる事とする。以下の用例の内、末尾の三例が連体修飾の用例である。

1・取りに遣はしたれば、螺鈿の帯の箱に、袋に入れて、御包みに包みて持て参れり。おとど、引き出で見たまへば、貞信公の石の、いとかしこきなり。驚きたまひて、「(中略)かしこき御宝になむせさせたまへる。あまた候ひつらめども、これがやうにはえあらじ」とのたまふ。

(宇津保物語)

2・作物所の別当する比、たがもとにやりたりけるにかあらん、物の絵様やるとて、「これがやうにつかつまつるべし」とかきたる真名の様、文字の、よにしらずあやしきを見つけて、「これがまゝにつかつまつらば、ことやうにこそあるべけれ」とて、殿上にやりたれば、人ぐとりて見ていみじう笑ひけるに、おほきにはらだちてこそにくみしか。

(枕草子)

3・琴、笛などならふ、又さこそはまだしきほどは、これがやうにいつしか、とおほゆるめ。

(枕草子)

4・さて、また、こと友だちどもぞ、来たりける。世中の物語りどもなどして、言ふ。「きのせ川きのふの淵ぞといふことをなむ、え知らぬ。それがやうに、この官とられたまへることをぞ、その罪とえ知らねば、このきのせ川になむ、来たる」とて、

(平中物語)

5・きみにけさあしたのしものおきていなばこひしきことにきえやわたらむ といへるなるべし、これはものにもなずらへてそれがやうになむあるとやうにいふなり、この歌よくかなへりとも見えす、

(古今和歌集序)

6・かほとりのまなくしばなくはるのみぞ夢のねしげき恋もするかな かほ鳥とは、きじの雄鳥を云ふなり、それがやうにてとなり、しば鳴くとは、しばしば鳴くなり

(秘蔵抄)

7・うらやましげなる物 経などならふとて、いみじうたどくしく、わすれがちに、返くおなじ所をよむに、法師はことほり、男も女も、くるくると、やすらかによみたるこそ、あれがやうにいつの世にあらん、とおぼゆれ。

(枕草子)

8・源中将おとらず思ひて、ゆへだちあそびありくに、宰相中将の御うへをいひいでて、「いまだ三十の期にをよばず」といふ詩を、さらにことに似ず誦し給し」などいへば、「などでかそれにをとらん。まさりてこそせめ」とてよむに、「さらに似るべくだにあらず」といへば、「わびしのことや。いかであれがやうに誦ぜん」との給を、「三十期、といふ所なん、すべていみじう愛敬づきたりし」などいへば、

(枕草子)

9・ソノウエ八又崇峻ヲサエラルベキヤウナクテ、マタツギ給ド、太子相シマイラセテ、程アラジ、兵ヤクモオハシマスベシ、御マナコシカぐ也ナド申サレヌ。ソレヲ信ジ給デ、猪ノ子ヲコロシテ、アレガヤウニワガニクキ者イツセンズラント仰ラレヌ。コノ王ウセ給バ、推古女帝ニツキテ太子執政シテ、

(愚管抄)

10・下仕の中にいと顔すくれたる、扇とるとて六位の蔵人ど

もよるに、心と投げやりたるこそ、やさしきものから、

あまり女にはあらぬかと思ゆれ。われらを、かれがやうにて出であよとあらば、又さてもさまよひありくばかりぞかし。

(紫式部日記)

11・うらうへになにまねくらん花すすきひとかたにこそ秋はゆくらめ(中略) 右歌は、うらうへにまねくといへるはおぼつかなし、すすきの人をまねくといはんとおもはば、風のふくかたをぞ、かれがやうに定なしといふべき、又秋のゆくかたをまねくといへる事やあらん、しらぬ事なれば、ともかうも申しがたし、(内大臣家歌合元永二年)

12・(中略) この西なる屋どもなんども、かしこのなれば、対のやうになむ。そがうちにも、とかくよかるべきにせさせたる所なめり」と聞こえたまへば、大宮、女御の君「げに、いかでか、これがやうなる所は、いづくにもあらむ。いとものよくこそこの筋あたりたまふれ」とのたまふほどに、

(宇津保物語)

13・年をへてふるのの小野に匂へども猶めづらしき秋のはつ花(中略)ふる野にさけらば、めもおどろくまじけれど、猶めづらしといへるほど心あり、さきにもこれがやうなる歌はきこえつれども、若、上下してまぎれてきこゆ、

(内大臣家歌合元永二年)

14・少将はとくたたれにしが、すこしたちのきてみやらるる
ほどにたたれたりし、ふたへのいろこきなほし、さしぬ
き、わかかへでのきぬ、そのころのひとへ、つねのこと
なれど、いろことにみえて、けいこのすがた、まことに
象物がたりいひたてたるやうにつつくしくみえしを、中
将、あれがやうなるみさまと身をおもはば、いかに命も
をしくて中中よしなからむ、などいひて

(建礼門院右京大夫集)

以上全十四例が、調査した資料に見られる全用例である。
冒頭にも述べたように、用例数は非常に少ないと言わざるを
得ない。しかし、少ないながらもそこにはいくつかの特徴が
見られる。以下にそれを述べる。

まず、「レ系指示詞+ガヤウ」の用例が見られるのは主に中
古の作品という事である。用例の確認された九作品中、「秘蔵
抄」と「愚管抄」を除く七作品は、一般に中古の作品とされ
るものである。又、殆どの用例が会話文に用いられている事も
特徴に挙げられる。判詞の用例はどちらとも言い難いが、十
四例中、残る十例は会話文の用例である。これらの点から考
えて、「レ系指示詞+ガヤウ」は中古において発生した形式で
あり、口語性の強い表現であった事が推測される。文献に確

認される用例数の少なさは、これに起因するものであると思わ
れる。更に、「レ系指示詞+ガヤウ」の用例が、主に会話文に
見られる点と関連するようにも思われるが、対象をより特定の
に指示し、何らかの強調的意味合いが感じられるものが多い。
客観的な判断に基づく断定は難しいが、用例1「驚きたまひ
て、くかしこき御宝になむせさせたまへる。あまた候ひつら
めども、あれがやうにはえあらじ」とのたまふ」、用例7「法
師はことほり、男も女も、くるくると、やすらかによみたるこ
そ、あれがやうにいつの世にあらん、とおぼゆれ。」等がその
典型である。前者は「驚きたまひて」の発言であり、後者は
感嘆の意が含まれている。又、この二例に限らず、「他のいず
れでもなく、特に(この・その・あの+指示対象で示されるも
の)のよう」に「という特定のな意味合いが感じられる用例が
多い。しかし、これは、指示代名詞を用いている事から考え
ると、当然の性質であるとも言える。又、会話文に用いられ
た場合、その話し手に男女、貴賤の差が特に見受けられない
事も特徴の一つとして挙げられる。用例数の制約はあるが、
以上が「レ系指示詞+ガヤウ」に見られる特徴である。

次に、迫野(二〇〇二)に記されている「コ・ソ・ア+ガ
ヤウ」という形式について触れたい。この形式は、「宇治拾
遺物語」に「コガヤウ」が一例、「宇津保物語」に「ソガヤ

ウ」が二例確認される。

15・さてこの男、大童子につかみつきて、「和先生、はや物ぬぎ給へ」といへば、童「さまあしとよ。さまであるべき事か」と云を、この男、たゞぬがせにぬがせて、前をひき明たるに、腰に鮭を二つ、腹にそへてさしたり。男「くはく」といひて、引出したるときに、此大童子、打見て、「あはれ、もつたいなき主哉。こがやうに、はだかになしてあさらんには、いかなる女御、后なりとも、腰に鮭の一二尺なきやうはありなんや」といひければ、そこらたちどまりて見ける者共、一度に「はつ」と笑ひけるとか。

(宇治拾遺物語)

16・そこに人くつどへらるなめり。おのれをはその中に入られぬ、つらしと聞えん。なほ上野の御子などに、思ひおとし給へるをなんねたくおもほゆる。さやうなる謀事をやせまし、など思へど、そがやうにもやせらるゝとてなん

(宇津保物語)

17・宮におとこの聞え給フ。「犬はいかゞありつる」「いみじく生じ出デぬべき者にこそあめれ。宮のそがやうになりしかど、これはいとけしきコとにこそ見えつるや」

(宇津保物語)

指示代名詞を冠し、下に「ガヤウ」と続く語構成は「レ系指示詞+ガヤウ」と同様である。又、僅か三例ではあるが、用例が確認できる時代も「レ系指示詞+ガヤウ」と同時期であると言える。更に、用例が会話文に集中している事、話し手に身分、男女の偏りが見られない事も同様であり、その用法も指示副詞と呼べるものであるように思われる。しかし、現段階では僅か三例しか確認できておらず、又、「コガヤウ」「ソガヤウ」から類推される「アガヤウ」「カガヤウ」の存在も不明である。従つて、本論では、「レ系指示詞+ガヤウ」との関連の有無、その用法等については判断を保留し、あくまでも用例の紹介のみに留めておきたい。

右に述べた「レ形指示詞+ガヤウ」の特徴の中で、指示体系との関連において、最も重要であると思われる点は、指示代名詞を冠して構成された指示副詞の最も初期の用例であると見られる点である。それ以前から用いられていた指示副詞「カク(カ)」「サ」が、指示代名詞「コ」「ソ」の母音交替によるものとの指摘がなされているが、指示代名詞とは異なる指示副詞として存在していたのに対し、「レ系指示詞+ガヤウ」の場合は、指示代名詞を冠している為に、名詞と副詞表現を同一の枠内に収める事が可能である。これは現代の指

示体系の枠組みと同じである。

三 「レ系指示詞+ガヤウ」の変化形

文献に残る「レ系指示詞+ガヤウ」の用例は、先述のように、非常に少ない。従って、これのみを基に論を展開する事は適当ではない。しかしながら、「レ系指示詞+ガヤウ」という形式は、決して、一時期、少数の人間によって使用されただけのものではなく、口頭語においてはかなりの使用頻度を有していた形式であると考えられる。その根拠が「コンガイ・ソンゲン・アガイ」等の語の存在である。これらの語は、中世以降の方言資料、及び、現在の方言においても見られ、その原形は「レ系指示詞+ガヤウ」であると考えられる。従って、これらの語は、用例の少ない「レ系指示詞+ガヤウ」のかつての様相を推測する上で非常に有用である。以下に、方言資料の用例を記す。翻刻は、『土井忠生訳 ロドリゲス日本大文典』『国語学大系』『物類称呼』『増補俚言集覽』に従った。傍線部は私に施したものである。

18・下、(Ximo)の地方全般に関する附記

多数の粗野な語がある。例へば、Angai (あんがい)、

Congai (じんがい)、『Angaina (あんがいな)』、『Cogaina (じんがいな)』、『Angaini (あんがいに)』、『Cogaini (こんがいに)』など。(ロドリゲス日本大文典)

19・一 其様なこと・此やうなこと・どのやうなこと。などいふべきを・そんなこと・こんなこと・どんにやこと・そがいなこと・こがいなこと・そんなにやこつちや・こんなこつちやなどいふこと葉を。よくくつしみ嗜みていふべからずと云り。京の者の口になれて。むまれ付たること葉のやうにて。なをりがたし。とりわきみづからなどはえなをし侍らず。田舎人のわらひ侍る京こと葉は是等第一なりとかや (かたこと)

20・あのやうに このやうにといふを 勢州長島及出雲辺又は播磨などにて あがい、こがいと云 九州にてあんがいに、こんがいと云 総州にてあげへに、こげへにといふ 又あんな、こんなといふは あのやうな このやうな也 そんなといふは そのやうな也 肥前佐賀にてそがいと云是なり (物類称呼)

21・増 あげんこげん 薩摩にてあんなこなをいふ (俚言集覽)

22・増 あんげいのんぼりてこんかいくだる 豊後国農民彼様に登り此様に下るをいふ (俚言集覽)

23・増 そげんぢやつた さつまにて左様で御座たをいふ

(俚言集覽)

24・増 そんげんこんげん 長崎にてそんなにこんなにな
り
(俚言集覽)

又、これらの語は現在においても使用されている。「方言
文法全国地図」第一巻第八図によると、「そんなことを言う
な」と言うときの「そんなことを」ところはどのように言
いますか。」という質問に対し、主に、九州全域、山口県を
除く中国地方、四国西部、新潟、山形周辺等、比較的広い範
囲において、「ソガン・ソギヤン・ソソガイ」等の回答が得
られている。その他にも、同様の回答を寄せた地域が点在し
ており、ほぼ周圈的に分布すると言って良いように思われる。
この点は、指示代名詞を冠した指示副詞の中で、「レ系指示
詞+ガヤウ」が最も初期に見られる事と符合する。尚、「ソ
ンゲン」「ソガン」等、語末に撥音を有するものは、「そんげ
んする」「そがんこと」のように用いられ、「ソソガイ」「ソ
ガイ」「ソゲー」等、語末に撥音を有さないものは、「そんが
いにする」「そがいなこと」のように用いられる場合が多い。
これは、かつて、「レ系指示詞+ガヤウ」に下接していた
「ナリ(ニ・ナル)」を含めて語形変化を起こしたかどうかにか

因るものと思われる。

右記の方言資料の用例は、語形の紹介程度のものであるの
で、用法の分析は行えない。しかし、いずれも「コノヤウ」
「ソソナ」等に対応して記されており、指示副詞としての用
法を持っていたと見る事に無理は無い。方言資料に挙げられ
ている地域と、現在における分布は、重なる地域が多いが、
「かたこと」の引用中に、「そんなこと・こんなこと・どん
なこと・そがいなこと・こがいなこと・そんなにやこつちや・
こんなこつちやなどいふこと葉」が、「田舎人のわらひ侍る
京こと葉」として記されている事は、かつての「レ系指示詞
+ガヤウ」の様相を推測する上で興味深い記述である。

以上のように、かつては中央においても用いられていたと
見られる記述が存在する事、周圈的にはあるが、現在にお
いても比較的広い地域で用いられている事、様々な変化形が
存在する事から見て、文献に残る用例数は少ないながらも、
その原形である「レ系指示詞+ガヤウ」が、かつては頻繁に
用いられていた形式であった事が推測される。

捕捉になるが、追野(二〇〇二)の注に記されているよう
に、「コンガイ・ソソゲン・アガイ」等の語が、先に用例の
みの紹介に留めた「コガヤウ・ソガヤウ(・アガヤウ)」か
らの変化形である可能性、或いは、その両者の変化形が混在

している可能性を否定できる訳ではない。しかし、いずれにしても、「コ・ソ・ア+ガヤウ」の用例数の極端な少なさが疑問に残ると言わざるを得ない。尚、「方言文法全国地図」によると、山口県東部の一地域において、「ソイガイ」という語形が確認されている。「コレ」「ソレ」「アレ」が「コイ」「ソイ」「アイ」となる場合がある事を考えると、少なくともこの語に関しては、「レ系指示詞+ガヤウ」を原形に置いた方が、説明が容易であるように思われる。

四. 結論

以上より、「レ系指示詞+ガヤウ」についての結論を述べる。先ず、「レ系指示詞+ガヤウ」は主に中古において見られる形式であり、「カク」「サ」とは異なり、指示代名詞を冠して構成される指示副詞の最も初期の用例である。又、文献に確認される用例数は少ないながらも、口頭語においては盛んに使用されていた形式と考えられる。中世以降、「レ系指示詞+ガヤウ」という原形を留めた形では用いられなくなるが、様々な語形変化を起しながら使用され、現在においても九州全域、山口県を除く中国地方、四国西部、新潟、山形周辺等の地域で用いられている。一方、中央における「レ系指示

詞+ガヤウ」の衰退要因は必ずしも明らかではないが、連体助詞「ガ」の衰退と関連があるように思われる。

又、中古における「レ系指示詞+ガヤウ」という形式の登場以後、指示代名詞を冠して構成された様々な指示副詞が現れる事を考えると、これは、指示詞の体系、特に指示副詞の体系における変化の一つの契機となった用例であると思われる。推測ではあるが、対象をより特定の指示する事ができる指示副詞表現への欲求が、「レ系指示詞+ガヤウ」という形式を生み出し、これが広く使用される事によって、指示代名詞を冠して副詞を構成するという意識が浸透したのではないかとも思われる。既に述べたように、「レ系指示詞+ガヤウ」について記された研究は殆ど見られないが、単に「コンガイ・ソゲン・アガイ」等の語の原形と考えられるという事だけではなく、指示代名詞を冠して構成された指示副詞の最も初期の用例として、より注目されるべき用例であるように思われる。「コ・ソ・ア+ガヤウ」の扱い等、判断を保留した箇所もあるが、以上を以て本論の結論としたい。

参考資料

- ・井上博嗣(一九九九年)「中古に於ける指示副詞「さ」の程度副詞・陳述副詞化について」源氏物語を資料として「女子大国文」
- 一一五 京都女子大学国文学会

- ・井上博嗣(一九九九b)「中古に於ける指示副詞「さ」の程度副詞・陳述副詞化について(二) 源氏物語以前の物語作品を資料として」(『女子大国文』一二二六 京都女子大学国文学会)
- ・井上博嗣(二〇〇〇)「中古に於ける指示副詞「さ」の程度副詞・陳述副詞化について(三)」(『女子大国文』一二八 京都女子大学国文学会)
- ・井上博嗣(二〇〇一)「中古に於ける指示副詞「かく」の程度副詞・陳述副詞化について」(『女子大国文』一三〇 京都女子大学国文学会)
- ・井上博嗣(二〇〇二a)「中古に於ける指示副詞「かく」+係助詞の意味用法(1)かくなむ・かくぞ・かくこそ・かくや その程度副詞・陳述副詞性」(『女子大国文』一三一 京都女子大学国文学会)
- ・井上博嗣(二〇〇二b)「中古に於ける「指示副詞「かく」+副助詞」の程度副詞性・陳述副詞性」(『京都語文』九 佛敎大学国語国文学会)
- ・井上博嗣(二〇〇二c)「中古に於ける指示副詞「かく」+係助詞の意味用法(2)かくも・かくしも・かくは その程度副詞・陳述副詞性」(『女子大国文』一三三 京都女子大学国文学会)
- ・岡崎友子(一九九九)「いわゆる「近称の指示副詞」について」(『語文』七三 大阪大学国語国文学会)
- ・岡崎友子(二〇〇一)「指示副詞の史的变化について」(『国文学解釈と教材の研究』四六一― 学灯社)
- ・岡崎友子(二〇〇二)「指示副詞の歴史的变化について」(『国文学解釈を中心として』(『国語学』五三―三 国語学会)
- ・岡崎友子(二〇〇三)「現代語・古代語の指示副詞をめぐって」(『日本語文法』三一―二 日本語文法学会)
- ・近藤泰弘(一九九二)「レ系指示詞の意味論的性格」(『文化言語学』その提言と建設 文化言語学編集委員会)
- ・近藤泰弘(一九九九)「中古語のレ系指示詞の性格 性格性の観点から」(『国語学』一九六 国語学会)
- ・迫野徳徳(二〇〇二)「指示詞におけるコソアド体系の整備」(『語文研究』九四 九州大学国語国文学会)
- ・橋本四郎(一九八二)「指示語の史的展開」(講座日本語学二 文法史 川端善明他 明治書院)
- ・山口亮二(一九九〇)「指示体系の推移」(『国語語彙史の研究』一巻)
- ・増補俚言集覧 井上頼国・近藤瓶城(一八九九) 皇典講究所印刷部
- ・室町時代の言語研究(一九二九) 湯澤幸吉郎 大岡山書店
- ・ロドリゲス 日本大文典(一九五五) 土井忠生訳 三省堂
- ・物類称呼 生活の古典双書一七(一九七六) 解説杉本つとむ 八坂書房
- ・新編国歌大観(一九八三) 新編国歌大観 編集委員会 角川書店
- ・方言文法全国地図(一九八九) 国立国語研究所
- ・指示詞(一九九二) 金水敏 田窪行則 ひつじ書房
- ・日本語指示体系の歴史(二〇〇二) 李長波 京都大学学術出版部
- ・『日本古典文学大系』岩波書店
- ・『新編日本古典文学全集』小学館
- ・『国語学大系』厚生閣
- ・くまがい まさひと・本学大学院博士課程、
日本学術振興会特別研究員)